

三原



新創
國產
舞臺
舞臺
舞臺

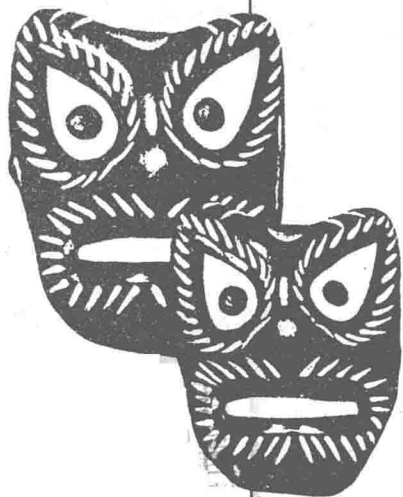
舞臺
舞臺
舞臺
舞臺
舞臺

舞臺

新例解
新国語辞典

●編著
林 四郎
野元菊雄
南不二男

編修代表



三省堂

1984年2月1日 発行



例解新国語辞典

定価 一、六〇〇円

一九八五年一月二〇日 第六刷発行

編著者 林 四 郎 (はやし・しろう) [編修代表]

野元 菊雄 (のもと・きくお)

南 不 二 男 (みなみ・ふじお)

発行者 株式会社三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 三省堂印刷株式会社

発行者 株式会社三省堂

〒102 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 編集 (03) 2301942

販売 (03) 2301943

総務 (03) 2301952

振替口座 東京六番〇〇〇

例解新国語・1,024 pp.

S 87 / 33 (116 2 171)

例解新国語辞典

BC 000760

© 1984 Sanseido Co., Ltd.

Made and printed in Japan at the Sanseido Press, Tokyo

筑波大学 博士教授 林 四郎 (代表)

国立国語研究所長 野元菊雄

国立国語研究所
日本語教育センター長 南不二男

東京外国語大学教授 国松 昭

東京学芸大学助教授 松岡 栄志

茨城大学教授 石綿 敏雄

早稲田大学教授 岩淵 匡

どびらのいじぶ

この辞書で

こんなことを

考えてください

ことば
ひとつのことば

このことばを使って

どんなことがいえるだろう

どんなことばとくむと

力がでてくるだろう

ほかのことばでも

言い表わせるだろうか

ことばは、使うためにあります

聞いたことば、

読んだことば、

出会ったことば、

それは、どう使われていたのか

ことばは、自分が、それをどう使おうか

「雨」↓空からの水滴
そして、……？



「雨が——ふる」「雨が——やむ」「雨が——あがる」

「雨に——ぬれる」「雨に——うたれる」

「どしゃぶりの——雨」「しとしとふる——雨」

「ぼつぼつ来た」

「夕立だ」



この辞書をつくりながら、
つくるわたしたちが、ます、
日本語を

見つけよう、見つけようとなりました

あなたは、前から日本語を知っています
でも、ことばの味わいは、いくらでもあります
もっと、もっと、日本語を見つけてみましょう

そうすると、

今までに利用してきた

国語辞典

漢和辞典

外国語の辞典

百科事典

それが、みんな、

もっとたくさん語りかけてきて、

さらに力強い友だちになるでしょう

あなたの世界は、どこまでもひろがっていきます



句例
対
表現
文例
参考
接統
語例
ア

この辞典を使う人のために

わたしたちは、日本語で育ち、日本語でものを考え、日本語で会話し、日本語で文章を書き、わたしたちの文化をきずいています。日本語は、長い歴史のなかで、わたしたちの血となり、肉となつて、わたしたちの存在そのものになつていいます。

辞書は、知識の宝庫といわれ、知らないことを知り、ふたしかなくとをたしかめる、つえとして、また、柱として、むかしからいまままで、言語生活に欠かすことのできない道具として使われてきました。

この例解新国語辞典は、その伝統をふまえながら、ことばの意味と使いかたがわかるだけではなく、実際の文章や会話の表現に役だつように、ことばの世界がひろがり、日本語がもっとすきになつて、ことばに関する興味と知識、教養が深まるように、という願いをこめて編修されています。生き生きとした豊かな日本語をつちかう、これは、あなたの辞典です。

(1) 見出しの語句は、日本語のもっとも基礎になる中学校の教材や中学生の読みものをベースに、生活のことば、学習のことば、教養のことばが選ばれています。科学や文化に関する用語や、人名・地名、文学作品なども、ことわざや故事成語、慣用語も、常用漢字も収められています。この見出しの語句のほかに、用例や対語、類義語の欄や、表現欄、囲み記事などで解説したことばを加えると、四万語をこえる数になります。このことばを、この辞典で、じっくり身につけていけば、知らないことばの意味がわかるだけでなく、知つていふことばの意味や用法がさらに深く広くわかつて、日本語の表現に直接役だつていくことでしょう。

(2) この辞典の見出し語のならば、五十音順になつています。外来語は、原則としてかたかなでのせてあり、「ピース」「ベース」

「ボーイ」などの長音は、発音どおりにそれぞれ「ピース」「ベエス」「ポオイ」のところにあらべてあります。同じかながらぶ場合は、

清音——濁音——半濁音(例：ひん——びん——ぴん)。

直音——促音または拗音(例：かつて——かつて、きよう——きよう)

の順になつていいます。同音語には、見出しの上に番号がふつてありますので、どこまでが同音語かが、ひとめでわかるでしょう。なお、漢字の項目は、一般の項目と番号をかえてあります。

(3) この辞典では、用例が主役のひとりです。実際の表現に役だつ、生きた用例が三段階にわけて示されています。文章や会話にそのまま活用することができまふし、もつとほかの表現ができるのではないか、ということも考えまふし、かりにもなりまふし。

■用例——ことばとことばの慣用的なむすびつきが示された、文をつくる上での直接の単位です。これに場面や条件をあたえて、いのある文章をつくつてみましょう。この辞典に示された句例のほかに、もつと別のむすびつきがないかを考えていく、きっかけにもなります。なお、()のなかに、かんたんな解説を示したり、「積極的(な)行動」「ふんわり(と)つもる」のように、「な」や「と」がついてもつかなくとも使うことのできることを省略して示したりしてあります。

■文例——そのことばが実際にどういう場面で、どのように使われるかを例示したものです。ことばを適切な場面で、状況に応じて使う力がやしなわれる、いわば、ことばの現場にふみこむ、たしかなきっかけがわかります。

■語例——そのことばがどういうことばとむすびついて別のことば(複合語)をつくつていくかのサンプルが示されています。むすびつきが多いことばも、むすびつきがせまいことばもあることがわかります。必要に応じて()のなかに意味や用法、その複合語がさらにどういうことばとむすびつきやすいかが示されています。

(4) ことばには、生きたニュアンスがあります。文の流れも、また、

場面もあります。

表現の欄は、そのことばの実際の使われかたや、似たことばとの関係、意味や用法のひろがりや制限などが示されています。この欄をじっくり読めば、そのことばの微妙なニュアンスや使いかたが身につけてくるでしょう。この辞典の主役をはたす欄のひとつです。

(5) 参考の欄には、そのことばの由来や、表記・文法などの留意点が示されています。そのことばの文化的、社会的な背景や百科事典的な情報もわかります。

(6) この辞典のもうひとつの主役は、イラストです。ことばのイメージがひろがり、ことばの使用の場面やことばの表現のニュアンスがわかります。また、ことばが示す実体がわかるイラストも入っています。項目のなかにある「脳」というしるしが、イラストへのガイド役です。さらに、一ページにわたるイラスト(「いえ」「ねこ」「みず」)本文のあとにある『語彙のひろがり』の中の見開き二ページにわたるイラストで、ことばを立体的にとらえることができますでしょう。

(7) 助詞・助動詞といえは、なにかめんどろくさいものだという印象がありますが、日本語の表現では、ことばどうしの関係や、話し手・書き手の気持ちを伝えるための大切なキーになります。日常生活のなかでの生きた会話が用例に示され、すっきりとやさしい解説とあわせて、理解と表現の世界へいざなってくれるでしょう。

(8) 対語や反対語、類義語がたくさん示されていますので、ことばのはばをひろげ、表現する力をつけてくれるでしょう。

(9) 大きな活字で示された常用漢字の項目で、漢字の使われかたや、その漢字がどういうことばをつくるのがわかります。部首や画数は、いま、いろいろな辞書でいろいろな立場がありますが、この辞典では現代人にいちばんわかりやすく、自然に理解できる示しかたがなされています。

(10) 筆順は、文字の全体の形がわかるように、いま書いている部分、これから書く部分、すでに書いた部分がそれぞれわけて示されていますから、全体のバランスを見ながら書くことができます。筆順は、

きれいで正確な字が書けることに目的がありますので、一つだけにきめられているわけでもありません。別な書き順がある字には※印がついています。

(11) 見出しの語句に示した表記の欄で、そのことばが、漢字やかなとともに、どういうふうに使われるかがわかります。標準表記は、一般の社会で、ふだん漢字がどのようにあてられているか、参考表記では、以前の文章ではどういう表記が使われていたかが示されています。さらに、用例の表記や参考欄をみれば、ことばの意味や場面によっては、漢字よりかなで書く方がいい場合があることもわかるようになっています。

(12) 同音語には、標準語のアクセントがついています。また、意味によってアクセントにちがいがいる場合には、参考欄でその使いわけが示されています。

(13) 古語は、現代語のふるさとです。現代語と古語とのつながりがわかるように、代表的な古語が、別々に収められています。古典のゆたかな息づかいが伝わってくることでしょう。(次ページ索引参照)

(14) 表現とことばの理解や運用に役だつ知識や情報を、囲み記事が、たのしく語りかけてくれるでしょう。(巻末索引参照)

(15) この辞典のこまかな約束は、おもて見返しを見てください。

(16) この辞典は、編著者や編修委員(厚らら参照)のほか、次の多くの方がたの御協力によってでき上がりました。ここに、おなまえを記して、心からの感謝をささげます。

相原林司・安倍千之・石井みち江・井ノ内宏・氏家洋子・梅津彰人・遠藤裕子・大江一道・大木正義・岡崎和夫・小沢義正・小林一仁・沢木幹栄・滋野雅民・白井啓介・鈴木孝典・田沼将・都築秀行・寺岡 深・中島友一・中道真木男・中山隆夫・名倉正博・林 博・平田嘉男・堀口純子・町田隆吉・町田守弘・山口仲美・山田 正・吉田夏生・渡部成哉、そのほかの方がた。それに、新しい創造へむけて、とりわけ困難な仕事を献身的になしとげてください。三省堂の編集部と三省堂印刷株式会社の方がた。

品詞・活用略語表

・固は、古語であることを示しています。
・(動サ変)は、多く(する)として示しました。

(名)	代名	代名詞	名詞
(形名)	形式名詞	形式名詞	名詞
(動)	動詞	動詞	動詞
(動五)	動詞五段活用	動詞五段活用	動詞
(動上一)	動詞上一段活用	動詞上一段活用	動詞
(動下一)	動詞下一段活用	動詞下一段活用	動詞
(動カ変)	動詞カ行変格活用	動詞カ行変格活用	動詞
(動サ変)	動詞サ行変格活用	動詞サ行変格活用	動詞
(する)	補助動詞	補助動詞	動詞
(補四)	動詞四段活用	動詞四段活用	動詞
(動上二固)	動詞上二段活用	動詞上二段活用	動詞
(動下二固)	動詞下二段活用	動詞下二段活用	動詞
(形)	形容詞	形容詞	形容詞
(補形)	補助形容詞	補助形容詞	形容詞
(形ク固)	形容詞ク活用	形容詞ク活用	形容詞
(形シク固)	形容詞シク活用	形容詞シク活用	形容詞
(形動)	形容動詞	形容動詞	形容詞
(形動ナリ固)	形容動詞ナリ活用	形容動詞ナリ活用	形容詞
(副)	副詞	副詞	副詞
(連体)	連体詞	連体詞	副詞
(接)	接続詞	接続詞	副詞
(感)	感動詞	感動詞	副詞
(格助)	格助詞	格助詞	副詞
(並助)	並立助詞	並立助詞	副詞
(準体言助)	準体言助詞	準体言助詞	副詞
(接助)	接統助詞	接統助詞	副詞
(副助)	副助詞	副助詞	副詞
(終助)	終助詞	終助詞	副詞
(助動)	助動詞	助動詞	副詞
(接頭)	接頭語	接頭語	副詞
(接尾)	接尾語	接尾語	副詞
(造語)	造語成分	造語成分	副詞

古語目次

・古語は、本文のページの左下に囲みで示してあります。

あかる〔赤る・明かる〕	八	つきづきし	五九四
あく〔飽く〕	八	つとめて	五九九
あした〔朝〕	一三	つれづれ〔徒然〕	六〇三
あはれ	二二	ながめ〔眺め〕	六六四
ありがたし〔有難し〕	二九	なまけなし〔情け無し〕	六六六
いたし	四九	なつかし〔懐かし〕	六六七
いたづら	五〇	なまめかし〔艶かし〕	六七〇
いつしか〔何時しか〕	五六	にくし〔憎し〕	六七九
いまいまし〔忌ま忌まし〕	六二	ねたし〔妬し〕	六九四
うしろめたし〔後ろめたし〕	七六	はかなし	七一三
うつくし〔愛し・美し〕	七九	はしたなし	七一九
おどろく〔驚く〕	一〇〇	はなやか〔花やか・華やか〕	七三〇
おもしろし〔面白し〕	一一五	ひごろ〔日頃〕	七五五
かたはらいし	一六八	ふるさと〔古里・故郷〕	八〇四
かなし〔愛し・悲し〕	一七四	ほのか〔仄か〕	八四〇
きこゆ〔聞こゆ〕	二〇九	まどふ〔惑ふ〕	八五〇
きよげ〔清げ〕	二二六	まめやか	八五八
きよら〔清ら〕	二二七	まもる〔守る〕	八五九
くちをし〔口惜し〕	二二七	みだる〔乱る〕	八七一
けしき〔気色〕	二二七	みる〔見る〕	八七四
げに〔実に〕	二七三	むすぶ〔結ぶ・揃ふ〕	八八四
こころぐるし〔心苦し〕	三一一	むつかし〔難し〕	八八五
こころやくし〔心にくし〕	三一六	めざまし〔目覚まし〕	八九三
こまやか〔細やか・濃やか〕	三二七	めづらし〔珍し〕	八九四
さうざうし	三四二	めでたし	八九五
さかし〔賢し〕	三四三	ものうし〔物憂し〕	九〇七
さながら	三五三	やさし〔優し〕	九一六
しのぶ〔忍ぶ・偲ぶ〕	三八九	ゆかし	九二二
しるし〔著し〕	四四三	ゆゆし	九三二
すこし	四四五	よろし〔宜し〕	九三八
すさまじ	四六六	わづらはし〔煩はし〕	九九〇
せめて	四九六	わびし〔花びし〕	九九一
たてまつる〔奉る〕	五五三	をかし	九九四
たのもし〔頼もし〕	五五五	をし〔愛し・惜し〕	九九四

アイセキ
あいせつ【哀切】(名・形動) あわれて深く心を痛め、動

かすまな感じ。同調 哀切な音色。哀切きわまりない。

あいせつ【哀訴】(名) 同情をひくうに、涙(なみ)なが

り相手につたえること。同哀願。アイン

あいせつ【愛想】(名) ①人にいい感じをあたためたため

の態度や動作を表面に出すこと。同愛想が。②愛敬。

③その人に好意をもちとする気持ち。同愛想が。④

愛想をつか。▽あいせつともいう。アインソ

表面客が帰席の際、主人が「どうも愛想がなくてすみ

せん」と言とき、愛想店では「こそうなど、人に対する

もて言を表わす。飲食店では「おあいせ」といって、勤

定(せい)の意味に使う。大事にして、注意がくし

まっぞうこと。同愛敬の品。

あいせつ【愛想尽かし】(名) 相手をすることがい

やたらと表わす態度やことば。同愛想尽かしを

言ふ。愛想尽かしてする。

アイソトープ(名) ①「同位体」のこと。◇Isotope

あいだの間(名) ①二のものにはさまれて、部分

同の間をあける。間をつめる。②ある時から他の時まで

のひびつきの時間。また、そのなかのある時。同間をおく

同食べている間は静かだ。夏休みの間に旅行する。③

人と人との関係。同間に入る。同友人たちの間で

そんなことを言うとは水くさ。④グループをつづける人

びとの範囲(まわ)。同友人の間では有名な話だ。

あいたい【相対する】(動サ変) ①二つのものが

向かいあふ。同県庁と市役所が道をたてて相対し

ている。②二つものが対立する。同相対する関係

あいだが【間柄】(名) ①人と人とのあつた関係

同柄「おふたりの間柄は」「兄と妹です。」②続言柄

同柄。③ふたりのあひだに親しいことかか程度。同柄

おふたりの間柄は親密をまして。④仲(なつ)。

同柄「続言柄」は、親子兄弟など、おにも血のつながりの

ある関係はいい、事務上の書類に使うことが多い。「間

柄」は、親子兄弟はもろん、友人や知人のような関

係を表わすので、使い道が広い。

あいちやく【愛着】(名) ①いつまでも心がひかれ、は

なれが感じること。古くは「あいやく」ともいった。

同愛使いたな品に愛着をもつ。

あいちやく【哀調】(名) 音楽や詩にたよう、ものごな

いじついで【相次いで】(副) 一つが終つたと思つた

あいつち【相次ぐ】(動五) 次から次へと続いておこ

あいつち【相違】(名) 相手の話や意見を聞

きながら、それに調子を合わせる。

あいて【相手】(名) ①自分といつしよなつて、なにかを

する人。同相手。②勝負や競争で、敵がむの人。同相手

パートナー。③勝負や競争で、敵がむの人。同相手の

相手は、なかなか手強い。同商売などの対象になる人。

同アイテアも相手に菓子売る店。

アイテア(名) ちょっと頭をはたらかさないと出てこないよ

うな思いつまらなう。同「なにかいいアイテアはありませ

んか」同アイテアマン。④着想。思いつき。◇idea

あいつち【哀悼】(名) 人の死に対する深い悲しみ。

あいつち【愛読】(名) ①とくにくすんで、よく読むこと

同愛読書。②愛読する作品を愛読する。同愛読書。

アイドル(名) みんながあこがれ、近づきたいと思つてい

る人。同アイドル歌手。③あこがれの的。◇idol

あいなば【相半ばする】(相半ばする) (動サ変) 相反する

性質が半分ずつある。同功罪相半ばする。

あいにく【生憎】(形動・副) もこのごのぐあいが悪いよ

うす。同あいにくな天気。同あいにく「こうが悪い

のでが。同あいにく」。

同女にかをしようとして、それをまたげることかおこた

アイン【愛】(名) 北海道から樺太(へつ)にかけて住む種族。

アイン【人】(名) 北海道から樺太(へつ)にかけて住む種族。

あい目【あい目】(名) ①歌などのき

れ目に入れて、声を手拍子(てあし)する。②人の話のき

れ目に入れて、話を進めやすくすることは。▽同あい目の

手を入れる。

あいのり【相乗り】(名) ①タクシーなどに、連れで

ない人といつしよに客として乗ること。②もともと仲間でない

ものがいつしよに仕事をすること。

同園デビで、「相乗り番組」といふは、他のスポンサーに

便乗(べんじよう)してスポンサーになることをつい。

あひびき【合いびき】(名) 牛肉(ごう)とふた

肉をまぜたひき肉。アヒビキ

あひびき【逢ひ引き】(名) ①恋人(ごう)ししが

人目(ごう)で会うこと。②しりあひ。

あひびき【愛】(名) ①愛する。なでたり、まするたりするなご、か

わいくてしなごない気持ちや態度にあらわすこと。

あひびき【合い服】(名) 春や秋に運着る洋服。④合い着

あひびき【相部屋】(名) 他人といつしよに部屋を使う

こと。またその部屋。同他人と相部屋になる。

あひぼう【相棒】(名) なにかを、いつしよにする相手。

同同むか、かをかつかう相手をそうよんだことかいう。

「おい、相棒のように、気さくに相手をか使わな。

アイボリー(名) 象牙(ぞう)の色。すじワイルム色がかった

白。◇Ivory

あいま【合間】(名) 続いてたごきをき、また始まる

までのあひだ。同同勉強の合間に運動をする。④切れ

目。絶え間。すき。

あいまい【曖昧】(形動) はつきしない。同同の問題

にあいまいな態度は許されな。④あやふや。どっちが

あいまい【曖昧模倣】(名) 全体にほんやりし

ていて、何がなんだか、よわからぬことかいう。

同同あいまいもした」の形でよく使う。

あいまつて【相まつて】(副) いくかのことかいつしよ

になつて。同同休日と好天が相まつてないへんな人出だ。

あいまよう【愛用】(名) ①気に入つて、よく使うこと。

同同愛用の万年筆。

あいらしい【愛らしい】(形) 思わずほほえみかくなる

ほどかわいらしい。同同愛らしい。

アイリス(名) ①植物(なつ)ツバタやアヤメなどの草花をま

めてつたて。同同園芸用(えんぎ)栽培(かいはい)。

アイランド【園地】(名) イギリスの西にある島。④園地

アイルランドの大部分をしめる共和国。首都は、ダブリン。◇Ireland

あいろ【隘路】(名) ①山道のせまくなったところ。②も

【 】の中は標準表記 『 』の中は参考表記 * は常用漢字表外の漢字 * は常用漢字表の音訓にない読み



のこを進め、あえて、一番むずかしいところ。同階路

アイロン(名) 衣類のしわをどったり、折り目をつけたりする道具。熱して使う。◇ Iron

アインシュタイン (名) 独 国 人 数 理 学 者。相対性理論を考えた人として有名。◇ Einstein

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ

あーう(会) 遭り(動五) ①(会) 人と顔合わせ



〔あ お ぐ〕

トの外に出ること。④イン。⑤野球で、バッターやランナー

が生きていること。⑥セーフ。⑦ある試みがたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

アウト(名) ①(名) 外。外がたにたになること。②(名) 外。外がたにたになること。

い色:水色などをまろめていうこと。同青葉。青虫。

交通信号で「安全」を進め、という意味を表す。同

「接頭」若「未熟だ」などの意味を表す。同

青二才。青坊主(特)

青は藍(より出し)で、ひしゆのほまれ

あおあお青(名) 副 詞 であるや青や緑が、一面に

あおい(名) (植物) フユアオイ、セネアオイなどの植

物をもとめていうこと。葉は多くハート形。アオイ

徳川家を使用した「葉の紋(心)」はアバアオイを因

来化したもの。

あお(青) (名) (形) ①(名) 晴れた空や深い海の

色をさす。②(名) 藍色に血のけがない。③(名) 金を落として

て、青い顔をして交番にかけた。④(名) 果実がまだま

ま熟していない。⑤(名) 緑色をしている。アアア

⑥(名) 青い果実「青い妻」などいえは、まだ果実や妻

が熟していない。人間として未熟なことをさす。

「お尻(心)が青い」も、子どもっぽくて、まだ一人まえでな

いという意味を表す言いかた。

青くなる ①(名) おろろやおたれで、顔から血のけがひく。同

財布(心)が青い(名) ①(名) 気づいて青くなった。②(名) 青さめる

あおなばら(名) 青海原(名) 一面に広がっている海。

あお(青) (名) (形) ①(名) 晴れた空や深い海の

●●●は重要語 ●は反対語および対語 ●●は意味の似たことば ▽は項目全体にかかる情報 □はアクセント

あ

「赤子の手をひねるよりやさしい」といふ。

あかさび【赤さび】①赤、錆【名】ぬれたりしたために鉄などの表面につく赤茶色のさび。

あかし【証し】(名) なたも悪いてををしていないという証明。因(因)身のあかしをなす。

あかじ【赤子】(名) ①収入よりも支出の方が多いこと。因(因)赤子になる。赤子を出す。②黒字。③印刷の校正で、誤りをなおすために書き入れる文字。因(因)赤字を入れる。

【参】①は、会計の帳簿(しよ)で、支出が収入をこえるとき赤字で記入すること。

アカシア【名】①オーストラリアやアフリカなどに多いマコ科の樹木。②ニセアカシア(ハリエンジュ)の①の、街路樹や庭木にする落葉高木。初夏に、白い花が咲く。◇acacia

あかお【赤潮】(名) プラクトンが異常に発生して海面が赤くなること。魚や貝が死ぬので、漁業には大敵。

あ(鮫)かして ありあまるものをそんざんに使う。因(因)ひまにあかて旅行する。金にあかして買ひあふる。

あかしんこう【赤信号】(名) ①交通信号の一つ。危険やとまれという意味を表わす赤色の信号。②危険な状態に近づいているのを、警戒(けい)として、という台詞。因(因)赤信号が出る。③危険信号。▽④青信号。

あかす明かす【動五】①かくしてたごを言う。因(因)たごを明かす。秘密を明かす。②うち明ける。③一晩中寝ないで、朝をむかえる。因(因)夜を明かす。因(因)語り明かす。泣き明かす。

あ(鮫)かす ありあまること。いづまでもいやにならぬで。因(因)あかす見せぬ。

あかつき【曉】(名) ①夜が明けかかるとき。②あけぼの。夜明け。③期待していたことが実現するそのとき。因(因)「成功のあかつきは、あらためてお祝いをしていましょう」

→あけぼの(園圃)・古語

【参】古くは「あかつき」といった。「明か時」「まり」あかるくなつてくる時」といふ意味。

あがつたり【上がつたり】(名) 仕事や商売が、まったくたぎたぎになつてしまつたこと。因(因)雨で商売上がたぎた。

あかつち【赤土】(名) 赤茶色でねばりけのある土。鉄分

を多く含む。畑には通さない。

アカデミー【名】学問や芸術の権威(けんい)ある人を集めた団体。◇Academy

アカデミック【形容】学問的である。因(因)アカデミックなふんぎ。

◇academic

あかでのん赤電話【名】店先や駅などに置かれ赤い色の公衆電話。

あか(とん)赤とんぼ【名】(動物)夏の終わりに秋にかけてむらむらして飛び、からだの赤い小さなチョウ。日本の秋を知らずるもの。①

あがなう【贖う】(動五) 罪のつぐないをする。因(因)罪をあがなう。

あかぬける【あか抜ける】(動一) 都合よく洗滌(せんじ)されて、やばなところや業人(ごうじん)くささがなくなる。因(因)あか抜けたセンス。

あかねいろ【あかね色】①茜色(せき)②赤い色。因(因)空があかね色にそまるとは、夕焼け空の形容にふさわしい表現である。

あかはじ【赤恥】(名) ひびいて恥。「あかっぱじ」は強めた言いかた。因(因)赤恥をかく。②大恥。

あかはた【赤旗】(名) 赤い布で作つた旗。①紅白試合、紅組(こうぐみ)の使の旗。②危険を知らせるために使われる旗。③革命(かくめい)や労働者階級(ろうどうしやうけい)が使う旗。

【参】①は原平合戦のとき、旗が白旗。平家が赤旗を使ったことらしい。②はフランス革命のとき、革命派が人民の血に染めた旗を革命のしるしとしたことらしい。

あかはたか【赤裸】(名) まったくなにも身につけていない生身(なまみ)のままの姿。また、毛をむじられた動物のようすにも。②すずぶたか、まのぶたか。

あかひと【赤人】(名) 凶犯(きんぱん)やまけのあかひと

あかふだ【赤札】(名) 赤い色の札。とくに、商品につけて、特価品・売約済などの意味を表わす赤い紙の札。

あかまつ【赤松】(名) 植物。クロマツとともに、日本の本州(ほんしゅう)でもよく見られるマツ。常緑高木。幹の表面が赤みを帯びている。パルマや建築、船家具などの材料として使われる。雌松(めまつ)。→くままつ

あかみ【赤み】(名) どちらかといつて、赤く感じられる色合い。因(因)赤みがかす。赤みを持つ。▽アカミ

あかみ【赤身】(名) 肉や魚で、脂肪(じゆ)の少ない赤い色の肉。②あから身、白身。因(因)あか

あがめる【崇める】(動一) 神や仏をよます。因(因)神をおがめる。先祖(せんぞ)がめる。②とちやちや。

あからが【赤ら顔】【緒ら顔】(名) なまからあからがにみ出たような顔のする赤い顔。

あからさま【形動】 かくしたりあまいにしたりしておいた方がよいこと。むだにに言うこと。因(因)あからさまな非難(ひなん)あからさまに言う。②露骨(ろこつ)。

あからむ【赤らむ】【明らむ】(動五) ①赤らむ。少しく赤くなる。因(因)ほのりと顔が赤らむ。②赤らむ。少

が熱す。因(因)かみ実(み)が赤らんできた。③明らむ。夜が明けて、空が明るくなる。因(因)東の空が明らんできた。

あからむ【あからむ】は、色の変化によって物の性質が変わつていくことを表わすことば。同じような言いかたに「し

【あからむ】【あからむ】【黒ずむ】などがある。

あからめる【赤らめる】(動一) はすかしまで顔を赤くする。因(因)顔をほつと赤らめる。②赤面する。

あかり【明かり】(名) ①暗いなかでの光。因(因)明かりがかす。明かりをともす。光が入るようにする。因(因)月明かり。雪明かり。②電灯や火など、あたりを明るくするもの。因(因)明かりをとす。明かりをつける。

あがり【上がり】(名) ①上の方へ高くなっていくこと。因(因)こころ道(みち)が上りになる。物の上がり下りがはげしい。②下がり。③続いているものが終わりになること。因(因)今日(けふ)はこれで上がり。④完了。

⑤作つていたものが完成すること。また、その状態。因(因)カレーライス一丁(いちやう)が上り。染め物の上りがきれいだ。因(因)今日(けふ)は店の上りが少ない。⑥利益。収益。⑦すし屋や料理屋で出すお茶。

【造語】①他のことばのあとに「き、それがもう終わった」とを表わす。因(因)雨(あめ)が上り、濡(ぬ)るに「病(やま)み」上り。②職業や身分を表わすことばのあとにつき、その人以前の仕事を地位を表わす。あがりい感じのことばにはならない。因(因)軍人(いくさ)上り。やくさ上り。

あがる【上がる】(動五) ①低いところから高い方へ動いて行く。因(因)

●●は重要語 ②は反対語および対語 ③は意味の似たことば ▽は項目全体にかかる情報 □はアクセント

